

「遺跡」、それはかつて人々がその地に暮らした痕跡。土地に刻まれた記憶。それは、古墳や城郭などの意図的に残された痕跡もあれば、住居跡や貝塚など、その意思とは関係なく残された生活の痕跡もあります。なぜそこに残されたのか、発掘調査ではその痕跡だけを頼りに、かつての人々の暮らしを復元します。上柏岩村遺跡に暮らした人々の痕跡から、弥生人の足跡をたどります。

旅立ちのムラ 海人の足跡

—「小形仿製鏡」と「住居廃絶儀礼」と「九州型石錘」—

上柏岩村遺跡は現在の松柏小学校の南側、緩やかな傾斜地に位置しています。遺跡名の「岩村」はこの地域の字名に由来しますが、かつて人々が暮らしたであろう遺跡の地面からは、山から流れてきた礫がゴロゴロと含まれており、字名もこれに由来するものと考えられます。

弥生のムラ

この遺跡から見つかった痕跡のうち、最も特徴的なのは住居跡と考えられる遺構で、合計20棟以上見つかりました。住居跡から見つかった土器から、弥生時代の終わり頃（3世紀中頃）を中心とする時代の集落と考えられます。

廃絶住居

これらの住居跡からは大量の土器が出土しており、約3千平方メートル弱の調査区で、破片を含めると数万点、コンテナにして150箱を超える出土

がありました。

これらの土器は、生活必需品としての土器の量を遥かに超えており、日常生活の痕跡とは到底考えられません。また、住居跡の中には幾重にも積み重なって、足の踏み場もないほどに集積された状態で見つかりました。

このような状況から、これらの土器は、住居の「廃絶」に伴って、廃棄されたものと考えられます。

住居廃絶儀礼

このような状態を見たとき、単なる「土器廃棄場所」のように思われるかもしれませんが、不要なものだけを捨てた廃棄場所とは異なる状況がみと



▲「住居跡内の土器集積状況」

れます。住居跡の一つからは、「小形仿製鏡」と呼ばれる、国内製の小さな青銅鏡が見つかりました。この青銅鏡は住居跡の中央付近の深い位置に置かれたように埋まっていた。また、この付近からは「九州型石錘」と呼ばれる、漁具も一緒に見つかりました。

当時、青銅鏡はやはり希少なものであり、これを単なる廃棄とは考えられません。すなわち、住居の廃絶に伴い、儀礼として置かれたものと考えられます。

つまり、この住居の廃絶は、①青銅鏡を用いた儀礼を行ったのち、②土器を住居内に重層的に集積したものであったと考えられます。このように考えると、土器の集積も単なる廃棄のみならず、一種の儀礼的要素を伴っていた可能性も考えられます。

旅立ちのムラ



▶「小形仿製鏡」出土状況

廃絶を最後に、上柏岩村遺跡に暮らした人々は、新天地へと移り住んだものと考えられます。

土器の集積は、単一の住居で行われたものではなく、遺跡全体の住居跡で行われていました。おりしも、古墳時代へと時代が移りゆく頃、この儀礼による住居の

海人の足跡

上柏岩村遺跡からは、合計7点の石錘が出土しており、いずれも海洋での使用が想定されるものです。

大型の石錘は出土自体が珍しく、出土しても1〜2点である場合が多い中で、7点の出土は特筆すべきものといえます。

石錘と上柏岩村遺跡

「錘」とはおもりを意味し、「石錘」とは文字通り、石のおもりを意味する漁具で、大きさや形状から、主に釣りに用いられたものと考えられます。

地形的には、上柏岩村遺跡は山塊にほど近い傾斜地に立地しています。海よりも山との関わりが強い地勢的要件にあって、上柏岩村遺跡ではなぜこのように多くの石錘を保持していたのでしょうか。このことは、先に触れた小形仿製鏡とも無関係ではないと考えられます。

九州型石錘と海人の足跡

小形仿製鏡の分布の中心は北部九州にあり、その多くが、北部九州産と考えら



▲「九州型石錘」出土状況

れます。弥生時代において交易・交通の中心は海路にあり、海人は石錘のような漁具をもつ、いわば漁民としての性格を有する一方で、流通をつかさどる交易者としての側面も併せ持っていたと考えられます。

このような海人と密接な関係にあったからこそ、上柏岩村遺跡では、石錘を保持し、小形仿製鏡を入手し得たのではないのでしょうか。大切に並べ置かれた石錘から、外洋を渡る海人の足跡が浮かび上がります。

四国中央市考古資料館 発掘調査速報展のお知らせ

今回紹介した上柏岩村遺跡出土土器や石錘などを展示した発掘調査速報展を開催します。速報展終了後、出土遺物は整理作業に入りますので、この機会をご覧ください。

会期：3月14日（土）～ 4月29日（水・祝）※金曜休館
場所：四国中央市考古資料館（川之江町 4069-1/ 電話：28-6289）
問合せ：文化図書課（電話：28-6043）

歴史にふれよう—ホンモノに出会おう

